

早稲田大学図書館九曜文庫蔵（甲本）『源氏物語不審抄出』——翻刻と解題——

ノット・ジエフリー

*キーワード

源氏物語・宗祇・不審抄出・注釈・九曜文庫

〔解題〕

本稿は、早稲田大学図書館の九曜文庫に所蔵される宗祇『源氏物語不審抄出』（文庫三〇／A〇一一四）を全文翻刻したものである。^①なお本稿で紹介する「甲本」のほか、同文庫にはもう一本、欠損の多い「乙本」が伝わる。^②

まずは、九曜文庫甲本の書誌を確認する。

○装訂 列帖装（全一冊）。

○寸法 縦二三・五糎×横一六・九糎。

○表紙 浅縹地に金泥の装飾が施されているが、一部に秋草らしい模様が認められる外、傷みが激しく、その詳細は判然としない（図版1～3、10）。見返しは金紙（図版4）。

○外題 表紙の左肩に題簽の剥離痕（原題簽は長方形、元は縦

一七・五糎×横三・二糎か）が確認できるが（図版1）、外題はない。

○内題 巻頭丁一行目に「源氏物語不審抄出」とある（図版5）。

○料紙 厚手の斐紙。

○紙数 五折からなり、全四十三紙が順に九、八、九、八、九紙の括りで綴られる。最初と最後に一丁分ずつが表紙と見返しの間に、その芯として挟み込まれ、計八十四丁の本となっている。

○墨付 七十九丁で、振り仮名などの傍記を含めて全て同筆と見える。

○遊紙 前一丁、後四丁。

○行数 九行書きで、一行の字数を十八～二十二字とし、約一八・二糎の高さで豊かに余白を残す（図版5、6）。

○**体裁** 注記項目ごとに、引用される『源氏物語』本文との識別を

図り、注記本文を一字下げて記す。又、同じ巻を対象とした一連の注記の前に、三字下げてその巻名が示される（図版5、6）。

○**印記** 巻頭丁の右下に双郭長方朱印「九曜文庫」が見える（図版5）。その他に単郭精円朱印「桜井」（未詳）が二ヶ所、奥書丁の左下（七九才）と最終丁の中央（後遊紙四丁ウ）に捺されている（図版7、8）。

○**年代** 書写時期は江戸期を遡らないと目されるが、書写奥書はない。

表紙と対照的に、本紙の保存状態は概ね良好で、わずかな虫損のほか四周に少々の汚れが認められるのみである。書写について記すべき特徴として、仮名書きにやや偏った用字傾向が挙げられよう。そのためか傍記は大変少なく、読み仮名数ヶ所と、漢文に時折施された訓点に限られる。加えて、それとはつきり分かる校合の跡はなく、見せ消ちの類も見当たらない。全体的によく整った体の書写といえる。

『源氏物語不審抄出』は、連歌師宗祇（一四二一～一五〇二）の手による最晩年の『源氏物語』注釈書である。その成立過程については不明な点が未だ少なくないが、一書としてまとまってきたのは一四九〇年代前半を下らない時期であろう。書名の通りに『源氏物語』のうち四十数

帖から、難解と思われた一二〇以上の「不審」箇所を取り上げ、丁寧な考察を行っている。宗祇が著した源氏注の中でもっとも多岐にわたる内容を持ち、また、その老熟した源氏学を直に伝える書としても極めて貴重な資料といえよう。しかし、それほどの価値を保有しているにもかかわらず『源氏物語不審抄出』はこれまでさほど注目されてこなかった。

その背景として基礎的な研究の立ち遅れが指摘しうるが、先達によってこの問題は解決されつつあるように思う。白井たつ子氏と伊永好見氏により、現存伝本の整理がある程度進められ、その大凡の系統分類も明らかになった。現時点で全九本の伝本が報告されており、奥書の別により二つのグループに分けることができる^④。

ここで諸本の分類について端的にまとめると、そのうち八本は『三源一覽』の編者とも知られる富小路俊通（一五二三年没）の以下の奥書を共通して持つ（解題）における引用には私に句読点を施した。以下同様。

〔俊通奥書^⑤〕

此一冊、宗祇法師抄出之所也。命可一覽由、其後下向関東、於相模国卒去。尤可歎而已。

かたみともその世にいはぬ心にてふかくかなしき筆のあとかな

富小路俊通 在判

ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫本のみは、冷泉家出身の僧侶明融（一五八二年没）による、まったく異なる以下の奥書を伝える。

〔明融奥書〕⁶

此抄出、宗祇法師注也。

桑門明融

俊通の奥書からは、客死に終わることとなった宗祇の最後の東下りに際して、『源氏物語不審抄出』を本人から預かり、そのまま自分の手元に残ってしまったらしい事情が知られる。現存伝本のほとんどは俊通のもとに残された本から派生して流布したものとみえる。その一方で、明融真筆とされる黒川文庫本の書写奥書からは、異なる流布経路の併存が窺えるようである。実際、この両グループの間には書名、所収注記、掲載本文等、大小様々な異同のあることが既に報告されている。⁸

現在、類本を持たない黒川文庫本の翻刻に加え、半世紀前に西尾市岩瀬文庫本の翻刻も発表されている。⁹ただし、後者はいわゆる俊通奥書所載グループに含まれる本でありながら、同グループ諸本と比べてみると、岩瀬文庫本に注記項目の立て方が数本と異なる箇所等が確認され、系統を代表する伝本とは認めがたい。

一方、九曜文庫甲本『源氏物語不審抄出』は、すでに伊永氏に指摘された如く、比較的に整った本文を伝えているように見受けられる。『源氏物語不審抄出』諸本の更なる整理は、現存伝本の網羅的な詳細調査を俟つ外ないが、本稿の目的はその進展に向け、既発表のものと内容を異にする伝本の翻刻を提供することにある。宗祇源氏学の今後の研究に資する一助となれば幸甚である。

〔注〕

(1) 同本の全カラー画像は所蔵機関の「古典籍総合データベース」下記リンクより確認できる(二〇二三年二月二十三日閲覧)。

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_a0114/index.html

(2) 「甲本」「乙本」の呼称は伊永好見「宗祇注の一形成過程―『源氏物語不審抄出』を通して―」『文学・語学』第二〇三号(二〇二二年三月)一〇一頁による。

(3) 白井たつ子「『源氏不審抄出』解題」同編『源氏不審抄出』(ノートルダム清心女子大学 古典叢書第三期6)(福武書店、一九八二年八月)で黒川本が初めて紹介・検討された(一〇八頁)。また伊永氏は注2前掲論で『源氏物語不審抄出』両本文系統とその現存伝本の基本的な整理を行い、『一葉抄』所引の『源氏物語不審抄出』を手掛かりに、両系統の成立順を考察した。

(4) 伊永氏の注2前掲論に、伝本全九本の系統分類があり(二頁)、直接参照されたいが、一部請求番号の情報を修正・更新しつつ、利用の便を図ってここに転記する。

〈俊通奥書本系〉

- ① 早稲田大学図書館九曜文庫(文三〇/A〇一四)
- ② 鳥原図書館肥前島原松平文庫(松一〇四一六)
- ③ 東京都立中央図書館加賀文庫(加八〇六五)
- ④ 東海大学附属図書館桃園文庫(桃九一〇九)

⑤早稲田大学図書館九曜文庫(文三〇/A〇一二三)

⑥西尾市岩瀬文庫(二〇三一一七)

⑦東北大学附属図書館狩野文庫(四一一四二三一一)

⑧天理大学附属天理図書館(九一三・三六/イ二八二)

〔明融奥書本系〕

⑨ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫(H一一九六)

なお、①⑤は早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で、

④⑨は国文学研究資料館「国書データベース」でその画像を確認できる。

(5) 本稿七九頁参照。なお、ここでは改行を無視し、返り点・読み仮名等も全て省くこととした。

(6) 白井氏の注5前掲影印、六九丁オ。

(7) 伊永氏の注8掲翻刻(「下」、五〇〇〜五一頁)。

(8) 詳しくは、白井氏の注3前掲解題を参照。

(9) 岩瀬文庫本(注4諸伝本一覧の⑥)の翻刻は、吉澤義則編『未刊国文学古注釈大系』第一巻(清文堂出版、一九六八年六月)三四七〜三八二頁。

黒川文庫本(注4諸伝本一覧の⑨)の翻刻は、伊永好見「翻刻ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏物語不審抄出』(上)」「ノートルダム清心女子大学紀要」第三七巻第一号(二〇一三年三月)二八〜四四頁、同「翻刻・解題ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏物語不審抄出』(下)」「ノートルダ

ム清心女子大学紀要』第三八巻第一号(二〇一四年三月)三八〜五一頁。

〔付記〕

①翻刻にあたって閲覧・撮影・掲載の許諾を賜った早稲田大学図書館に、心より深謝申し上げます。

②本稿は科学研究費補助金(若手研究(JP21K12939))「戦国期古典学史の基礎的研究―連歌師の源氏学を中心に―」による研究成果の一部である。

図版 1
表紙



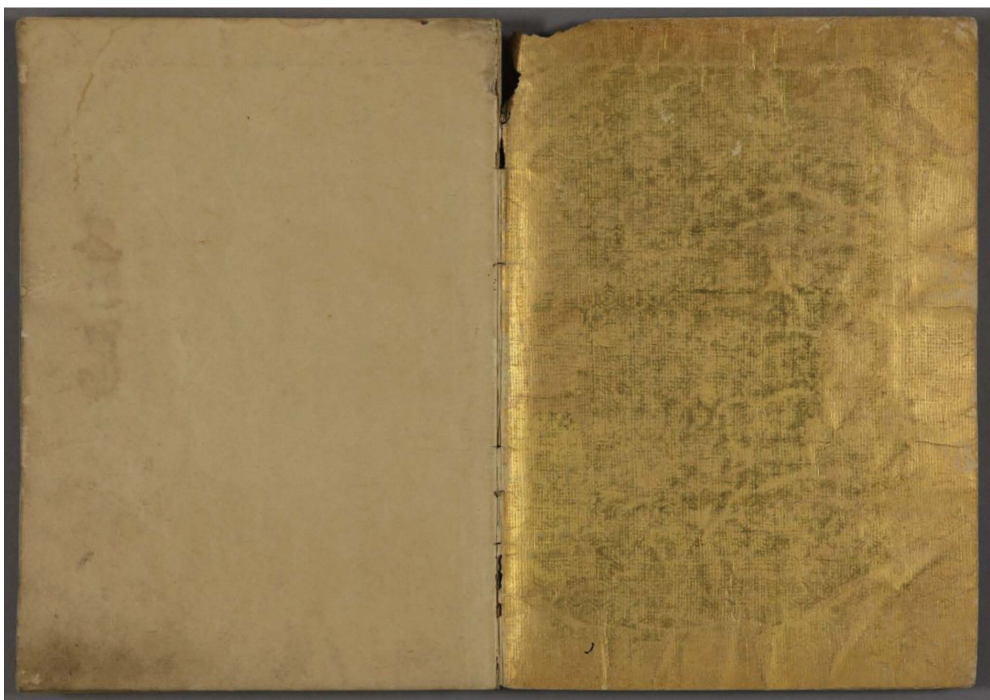
図版2 表紙(小)



図版3 裏表紙(小)



図版4 表紙見返(右)・遊紙(左)



源氏物語不審抄か

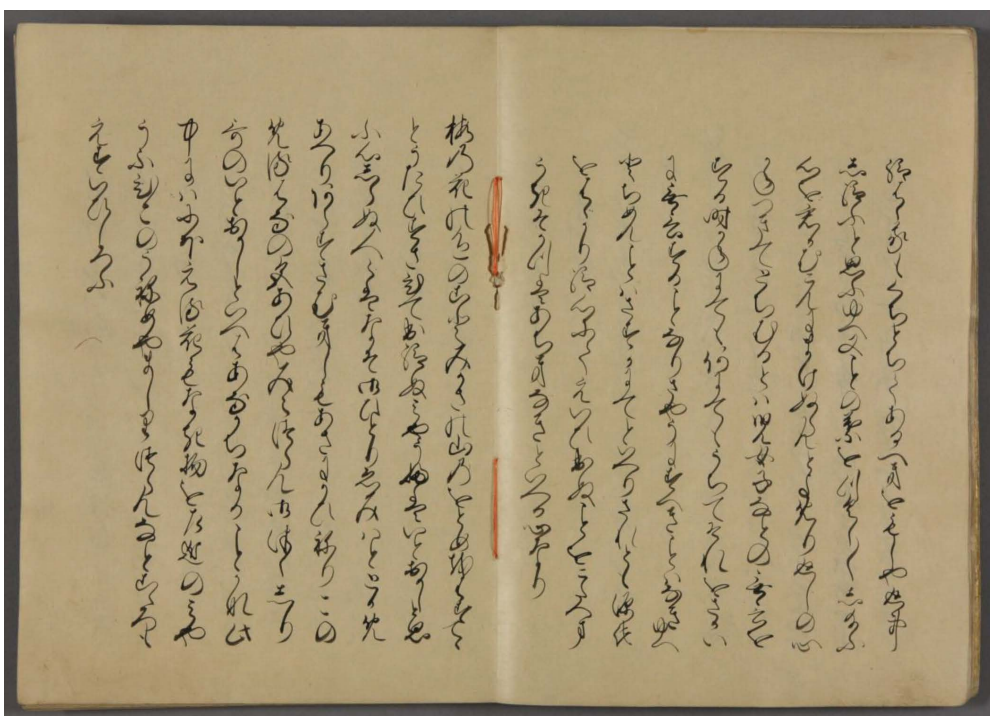
きりりか

伊弉持乃御時より、新文をあらまのりあつし
如多心申ふ

けいしきり乃御時よるをきりりい伊弉持乃家の
集のりきり乃御時よるあつし
けいしきり乃御時よるをきりりい伊弉持乃家の
新文のりきり乃御時よるの言ことばなり
りて我しと成されし書りて後文の



図版6 綴じ紐（七丁ウ〜八丁オ）



図版7 奥書丁「桜井」蔵書印（大）（七九丁オ）



図版8 最終丁「桜井」蔵書印（大）（後遊紙 四丁ウ）



一冊宗祇法抄抄^{宗祇}可^命可^下
一覽由^{宗祇}之後^下向^{宗祇}宗^祇於^{宗祇}相^{宗祇}換^{宗祇}必^{宗祇}卒^{宗祇}
去^{宗祇}了^{宗祇}款^{宗祇}而^{宗祇}已^{宗祇}

かゝる^{宗祇}と^{宗祇}も^{宗祇}ろ^{宗祇}乃^{宗祇}世^{宗祇}小^{宗祇}の^{宗祇}歎^{宗祇}心^{宗祇}す^{宗祇}
ふ^{宗祇}く^{宗祇}か^{宗祇}る^{宗祇}を^{宗祇}宗^祇れ^{宗祇}あ^{宗祇}と^{宗祇}れ^{宗祇}

苗小路

俊通 在判





図版
10
裏表紙

〔凡例〕

一、本稿は、宗祇『源氏物語不審抄出』の全文翻刻で、早稲田大学図書館九曜文庫甲本（文庫三〇A〇一一四）を底本とした。

一、丁変わりを「」で示したが、組版の都合もあり、最終行の末尾で一回改行して、その表示を次行に回すこととした。

一、改行箇所を全て原本のままとした。ただし、一行に書き切れなかった数文字分を行末の横に追い込んでいる場合、原本の様子を再現せず、むしろ書写者の行配り意識を尊重して一行書きとした。

一、底本に従って、注記を一字下げ、巻名表示を三字下げとした。

一、漢字の振り仮名と漢文訓読の返り点・読み仮名等は、全て原本のままとし、組版上の限界はあるものの、その位置もなるべく再現した。

一、漢字は概ね通行の字体に改めたが、異体字を原本の通りとした例もある（「哥」等）。

一、平仮名・片仮名の別は底本のままとし、僅かながら濁点が施されている箇所は全て原本の通りに翻字した。

右の如く、この「九曜文庫甲本」をできるだけ原本に忠実な形で提供すべく努めたが、同時に利用の便を図りつつ、以下のような工夫も施してみた。

一、宗祇による巻々の巻名表記をゴシック体で目立つようにした。

一、全一二四の注記に半角のアラビア数字の通し番号を振った。

一、この注記番号の直下に、参照しやすいように『源氏物語大成校異篇』の該当する頁（漢数字）と行（丸付き数字）を（ ）に示した。

一、『大成』番号に続け、当該注記が対象とする巻名を記し、更に巻名の下に当該注記の同巻に対しての通し番号（全角のアラビア数字）を振った（なお、この通し番号は『不審抄出』内部の出現順に振ったもので、『源氏物語』の本文順と必ずしも一致しない）。

一、注記番号、『大成』番号、巻名、巻内通し番号を各注記冒頭の右肩に一行空けて表示し、本文と識別できるように、全てを四角で囲った。

〔例〕 242（一四二五⑬） 雲隠 2

|| 『大成』一四二五頁の十六行目

|| 「雲隠」巻を対象とする

|| 『不審抄出』で「雲隠」巻

を対象とした二つ目の注記

一、『源氏物語不審抄出』所収注記の巻ごとの配分などを一覧できるように、〔凡例〕に続けて各注記の（1）対象巻名（2）通し番号（3）原本における丁数（4）該当する『大成』番号を載せた表を附した。

巻名	注記番号	丁数	『大成』
若菜下	058	43 才	1139:10
	059	43 才	1140:03
	060	43 ウ	1150:08
	061	44 才	1156:01
	062	44 ウ	1160:06
	063	44 ウ	1160:07
	064	44 ウ	1163:08
	065	45 才	1180:09
	066	45 ウ	1189:01
柏木	067	46 才	1264:03
	068	47 才	1252:07
横笛			
鈴虫			
夕霧	069	47 ウ	1359:08
	070	48 才	1359:10
御法	071	48 ウ	1386:10
	072	49 ウ	1387:09
	073	49 ウ	1396:13
幻	074	50 才	1404:14
	075	51 才	1408:04
	076	51 ウ	1414:06
	077	52 ウ	1415:09
	078	53 ウ	1416:05
	079	54 才	1414:12
匂宮	080	54 ウ	1432:05
	081	55 才	1437:14
紅梅	082	55 才	1447:01
	083	55 ウ	1458:08
竹河	084	56 才	1463:01
	085	56 ウ	1463:02
	086	57 才	1463:03
	087	57 ウ	1466:04
	088	57 ウ	1490:12
	089	58 ウ	1497:06

巻名	注記番号	丁数	『大成』
(竹河)	090	58 ウ	1497:07
	091	59 才	1499:09
	092	59 ウ	1500:10
	093	59 ウ	1501:06
橋姫	094	60 才	1516:05
	095	60 ウ	1519:14
椎本	096	61 才	1573:12
	097	62 才	1574:01
	098	62 ウ	1574:04
総角	099	63 ウ	1611:10
	100	64 才	1612:03
	101	64 ウ	1625:13
	102	65 才	1664:07
早蕨	103	66 ウ	1682:09
	104	66 ウ	1685:08
宿木	105	67 才	1701:01
	106	68 才	1702:03
	107	68 才	1704:04
	108	68 ウ	1708:02
	109	68 ウ	1718:07
	110	69 才	1726:09
東屋	111	69 ウ	1778:12
	112	70 才	1825:06
浮舟	113	70 ウ	1839:13
	114	71 ウ	1864:04
	115	72 ウ	1869:11
蜻蛉	116	73 才	1887:11
	117	73 ウ	1946:10
	118	74 才	1977:14
	119	74 才	1978:02
	120	74 ウ	1978:03
	121	75 才	1978:06
	122	75 ウ	1981:04
手習	123	77 才	2023:13
夢浮橋	124	78 才	2057:02

表1 九曜文庫甲本『源氏物語不審抄出』所収注記一覧

※『大成』 = 『源氏物語大成 校異篇』該当箇所(頁:行)

巻名	注記番号	丁数	『大成』
桐壺	001	1 才	5:01
	002	1 ウ	23:11
帚木	003	2 ウ	35:01
空蟬			
夕顔	004	4 才	120:14
	005	5 才	132:08
	006	5 ウ	140:05
	007	6 才	146:02
若紫			
末摘花	008	7 才	213:09
	009	8 才	226:13
紅葉賀	010	9 ウ	251:08
花宴			
葵	011	10 才	292:05
	012	11 ウ	309:08
	013	12 ウ	309:06
	014	13 才	311:09
	015	14 才	311:14
賢木	016	15 ウ	336:04
	017	16 才	340:03
	018	17 才	369:01
花散里	019	17 ウ	388:07
須磨	020	19 才	426:11
	021	19 ウ	428:14
	022	20 才	433:11
明石	023	20 ウ	447:11
	024	22 才	460:03
	025	23 才	477:07
滯標			
蓬生			
関屋			
絵合	026	23 ウ	564:10
松風	027	24 ウ	585:12
	028	25 ウ	594:03

巻名	注記番号	丁数	『大成』
薄雲	029	26 ウ	629:13
朝顔	030	27 ウ	649:05
乙女			
玉鬘	031	28 才	726:10
	032	28 ウ	726:14
	033	29 才	731:03
初音	034	30 才	775:11
	035	30 ウ	776:06
胡蝶	036	31 才	781:01
	037	31 ウ	782:12
	038	32 才	785:04
蛩			
常夏			
篝火	039	32 ウ	857:12
野分	040	33 才	877:06
	041	34 才	877:13
行幸			
藤袴	042	35 才	920:10
	043	35 ウ	920:13
	044	36 才	923:11
	045	36 ウ	923:13
真木柱	046	37 才	935:08
	047	38 才	938:14
梅枝	048	38 ウ	977:06
	049	39 才	981:09
	050	39 ウ	983:05
藤裏葉	051	40 才	1002:09
	052	40 ウ	1003:05
	053	40 ウ	1004:06
若菜上	054	41 ウ	1038:10
	055	41 ウ	1109:02
	056	42 才	1109:04
	057	42 ウ	1109:07

〔翻刻〕

源氏物語不審抄出

きりつほ

001 (五①) 桐壺1

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ
給ける中に

此いつれの御時にかとかけけるは伊勢か家の

集のはしめにいつれの御時にかありけむ

おほみやす所おはしましけるとかけり七条の

后宮の御ことなり伊勢はその官女たるによ

りて我ことをわれとは書いてすして后宮の

「 一オ

御ことをまつかけりわか身のことをもむかしのや
うにかきなせりその心をむらさき式部思
ひけるなるへしそうして此物語をは我かき
たりとみえぬやうに作なしたる物なり寔
につくり物語の本意なるへし

002 (三三①) 桐壺2

うへもかきりなき御思ひとちにてなうと見
給ふそあやしくよそへきこえつへき心ちなん
するなめしとおほさてらうたくし給へつらつ
きまみなどはいとようになりしゆへかよひて

みえ給もにけなからすなときこえつけ給へれは

つらつきまみなどいとようになりしとは

きりつほの更衣と源氏の君とのことなり

ゆへかよひてみえ給もにけなからすとは藤つ

ほの女御の更衣に給へる心なりこれは此

女御の御ことを先帝の時の内侍のすけ更

衣ににたまへるよし御門に申侍しその筆

の行糸なりしかれば藤つほの宮と源氏と

もにかよひ給へる心にあ

「 一ウ

「 二オ

光源氏名のみことくしういひけたれ給ふと
かおほかなるにいと、かゝるすきこと、もをす
世にも聞つたへてかろひたる名をやなかさ
むと忍ひ給けるかくろへことをさへかたりつた
へけん人の物いひさかなさよさるはいといたう
世をは、かり給ひけるほとなよひかにおかしき
ことはなくてかた野の少将にはわらはれ給ひ
けんかし

「 二ウ

光源氏名のみことくしうとは源氏の君の
ことをほめたる詞なりいひけたれ給ふとか
おほかなるとは世の中のならひにて名
たかくいかめしき人をもいひけつならひの
儀なりいと、かゝるすきこと、はかうしよく
のこと也すゑの世にき、つたへてかろひたる
名をやなかさんと源氏のかゝるかたのなを
忍ひ給ふことなからされとなを其名きこ
ゆることをいはんとてかくろへことを語つたへ

「 三オ

けん人の物いひさかなさよと紫式部かいへる
こと葉也かたりつたへけむ人とはむかしの
の心にかけりさるはいといたく世をは、かり
まめたち給けるほとは源氏の君かうしよく
の人なからうへにはしちをたてたる人にて
好色を忍ひ給ふゆへなよひかにおかしき事
はなしといへりそれをかたの、少将にはわらは
れんといへりかたの、少将のことはふるき物
かたりの名もおなし時の人にはなけれと

「 三ウ

紫式部かとりあはせてくはへたる心なり彼
少将はうへしたなくかうしよくの人なり此ま
きは始終ともに其心をえかたししかる間一冊
別註之ものあり

夕かほ

004 (二二〇⑭) 夕顔 1

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえしえにこそ有けれ
返し

光ありとみし夕顔のうは露はたそかれ時の空めなりけり
此二首は夕かほのうへをともしなひてなにかしの院にお

「 四オ

はしましける時いまゝては御名をしのひかほをさへさやかにみせ給はず侍しをこゝにて夕かほにひもとく花はとの給へるはかほをさへさやかにみえ給ふ心なりたよりにみえしえにこそ有けれどとは心あてにそれかとそみるなど、いひかはし給ひしそのことなり返し心はそのおり哥などよみ出てまいらせし事思出るにはつかしきことなればたそかれ時のそらめなりけりとひかりありとみしことをもおほめきていへる面白や源氏の

御心にもかなふとみえたり

005 (一三三)⑧ 夕顔2

さらにこともなくしなせとそのほどのさほうの給へるなにかことくしくすへきにも侍らすとてたつこれは夕かほの君うせて後夕かほの上のさうそのの事こともなくしなせと源氏の君おほせことあるは事をつゝめたるやうにきこゆさにてはなし源氏の御身にはふそくなるへし事なくとは世のそしりもなき様にとのたまへる心なり其御心をこれみつうけたまはりてなにかことくしくもすへき

「 四ウ

とてたつとはおほせのことくはなにかすへき忍ひやかにと思ふ心にていへり

006 (一四〇)⑤ 夕顔3

竹の中に家鳩といふ鳥のふつゝかになくをきゝてかのありし院に此鳥のなきしをいとおそろしと思ひたりしさまのおもかけにらうたくおほし出らるれば此鳥のといへはその院にてきゝ給ひし鳥家鳩ときこゆそれはふくろうなるへし是もすこし心えかたくや或説ありし院にこのといひきるやうにして鳥のなきしをといへはさういなしといへりそ

「 五ウ

れもまた聞にくゝやたゝありし院にかゝる鳥のなきしなとおほやうにいひてやしかるへからん一義云此鳥家はと成へしそのゆへは彼院にてふくろうのなきしは夕かほうせての事もおそろしと思ひたりしさまのおもかけにらうたくおほしいてゝと待ればふくろうときこえず家鳩のなく事

007 (一四六)② 夕顔4

をまついひ出ねとすることゝきこゆかやうのくたくしくしきことはあなちにかくろへ忍ひ給しもいとおしくてみなもらしとゝめたるをなとみ

「 六オ

「 五オ

かとの御子ならんからにみむ人さへかたほならずも
のほめかちなるとつくりことめきてとりなす人
ものし給ければなんあまり物いひさかなきつみさ
り所なく

かやうのくたくしきこと、は源氏の君のかうし
よくの道のいろくのことなりあまりにはいかでと
もらせはまた物ほめかちなりと世人のいへはか
きとむるよしをいへり世中の人の心のわりなき
をいへりこれも大かたこゝろえかたければしるし

をけるはかりなり

末つむ

008 (二二三)⑨ 末摘花1

いくそたひ君かし、まにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに
返し

かねつきでとちめんことはさすかにてこたへまうきそかつはあやなき

是は源氏の君はしめてすゑつむの所へしのひお

はしましけるに源氏の君のいろくのことの葉を

つくし給へとさらに返事し給はぬとき此哥をよ

めりし、まとは無言の事なり一かう物ないひそとの

「 七オ

「 六ウ

給は、我もくちとちてあるへきをもしや返事
し給ふと思ふゆへ又ことの葉をつくし給ふ
心を君かむこんにまけぬらんとよめり返し的心
かねつきでとちむるとは兎女子などの無言を
する時かねにても何にてもうちてそれをさかい
に無言することなりさやうにすへきことはなきゆへ
とちめんことはさすかにてといへりされとも源氏
をはかり給心にてえいひ出ぬことをこたへま
うきそかつはあちきなきといへる心なり

009 (二二六)⑬ 末摘花2

梅の花の色のことみかさの山のをとめはすて、

とうたひすさひて出給ぬみやうふはいとおかしと思

ふ心しらぬ人さはなそ御ひとりゑみはととかめ

あへりあらずさむきしもあさにかひねりこの

めるはなの色あひやみえつらん御つ、しり

哥のいとおかしといへはあなかななることかな此

中にはほえる花もなき物を左近のみや

うふひこのうねめやましりつらんなどこゝろも

えすいひしろふ

「 八オ

「 七ウ

是は師走のつこもり比す多つむより御き

ぬなど源氏へをくり給ひしときその身にか
やうのことさしすきたるとおほしてよろし
からぬ御けしきありし時梅の花の色のこと、
うたひ給へる也是は政事要略衛門府の

風俗哥云た、良女の花の如加以祢利好牟
夜滅紫色好牟夜といふうたをた、梅の花

とかへての給へりかひねりとは色くれなる
なりす多つむ花のいろのあかきをいはんと

ての心也三笠の山のをとめをはすて、といへるひ
たちの宮のをとめといはんためなりす多つ
むはひたちのみやのひめ君なれば也まつみか
さの山といふことは求子の哥によりいへる也も
めこの哥は諸社にてうたふ時其所の名を
いふことあり春日にてはみかさの山のをとめこ
うたふへきことなりた、三かさの山のをとめを
すて、ひたちの宮のをとめといはまほしきの
心なりされとあまりににあはぬ事にてはい

はるましきを春日の明神はひたちより出給

ひたる御神なり三笠も鹿島もおなし御神
三しやなれば其たよりあるによりかくいへる
なりまことに是は此物語のしよちうにいつかう
みえさること也師説の密伝也

もみちの賀

010 (二五二⑧) 紅葉賀1

さうの琴はなかのほそをたへかたきとて平調
にをしくたしてしらへ給ふ

此事心えかたくやた、いまひき給ふへき楽

は長保楽の破保曾呂俱世利是なりまへの
しらへ平調よりはりたるてうしなるへし中
のほそをは中のをなり中のこのかみはなといへる
たくひなるへし此すゑにかたきてうしともを
た、一わたりにならひとり給ふとは色く／＼のて
うしきたまるましきにや

あふひ

011 (二九二⑤) 葵1

いとましからぬかさしあらそひかなとさうくしう
おほせとかやうにいとおもなからぬ人はた人あひの

「 八ウ

「 九オ

「 九ウ

「 一〇オ

り給へるにつゝ、まれてはかなき御いらへも心や
すくきこえぬとまはゆし

是は宮す所の車あらそひの、ちのまつりの

日源氏の君紫上をひとつ車にてまつり

御らんせしに車の立とさしあひたりし時源内侍

あふきをさしいて、人をまねきて所さりき

こえんと申侍しかは所もよきわたりなれば

いかてえ給へるそなどの給ひし時

はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふを待ける

とよみて奉りしに

かさしける心そあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを

とよみ給へりし其おりおほくの女車侍し也

源内侍とのかさしあらそひを御心につかて大

かたのものみの女はう車に哥などをくり給

ひけるなるへしいとましからぬかさしあらそひ

さうくしうおほせと、は源内侍のことを源氏

の君おほす心なりかやうにいとおもなからぬ人

はたと源内侍をはおもなき人にさたまりてかやう

「一一オ

におもなからぬ人とは源内侍かやうにおもなからぬ

人といふ心もおもなきとはおもてつれなき心也さ

らぬ車などに源氏よりをとつれ給へと人のり

あひ給へるにつゝ、まれて心やすくはかなき御

いらへをもせぬといふ心也此段のつゝ、きさらに

みえわかさるものなり

012 (三〇九⑧) 葵2

かのいさよひのさやかならさりし秋のことなとさら

ぬもさまくのすきことゝもをくまなくいひあら

はし給てはてくはあはれなる世をいひくてう

ちなきなどし給けり

これはあふひのうへうせ給ひて後源氏の君

正日まていみにこもり給ひし時頭中将おはして

源氏の君にこしかたのすきことゝもをいひなく

さめ給ひしこと也彼いさよひのさやかならさり

しとは二月十六日の夜すゑつむのきんの音

き、給ときいるかたみせぬいさよひの月と頭

中将よみ給ひしことなり秋のことなとゝはすゑ

つむに源氏の君あひそめ給へるあした朱雀

「一二オ

院の行幸のことに源氏の方へおはして則とう
しやして内へまいり給ふ時ねふたけに源氏の
おはしましけるをたゝにはあらしなととかめ給
ひしことなりこと葉ひとつにつゝきて心えにく
きものなり

013 (三〇九⑥) 葵3

あないをしおはおとゝのうへないたうかるめ給
ふそといさめ給ものから

おはとはうはといふ心もおとゝは殿なり是は

源内侍かことを源氏の君頭中将にあひての

「一二ウ

給へる詞也源内侍をかくいへることはらう女な
れば御門のされことにおほせらるゝことあるに
より唯今かくの給へり此ことあさかほのまき
にみえたり

014 (三一一⑨) 葵4

たへまとをけれとさの物となりたる御ふみな
れはとかなくて御らんせさす

これはあふひのうへうせ給へる比源氏の君左のお
とゝの方にてよろつものあはれなる比齋院へ

わきて此くれこそ袖は露け、れ物思ふ秋はあまたへぬれと

「一三オ

といへる其時のふみをさいるんの女はうのいへる
こと葉たえまとをけれどゝは源氏の君齋

院へ久敷をとつれ給はぬこと也かくをとつれ

のたえぬれはかならずれい思ひそめしこと

の給ふへきと思ふに此おりはあふひのうへのな

けきに其事はの給はし折節あはれなるこ

との御をとつれにそあらんと思ひてみせたてま

つるよし也さのものといふことは心得かたくや

これはさしすせその五いんなるへし大かた世

上にそのやうなといふことをさやうなるといふ

おなしことは也そのことくさの物とはそのことゝいふ

儀なり心はあふひのうへのいみにおはしませはさう

くしき心をなくさめ給はんとてまいらせらるゝ

ふみと思ふ心也源氏の君のゑむしよをはさい院

のむつかしからせ給ふほとにさもなきふみとみる

によりとかなくとはいへり

015 (三一一⑭) 葵5

おほうち山をは思ひやりきこえなからえやはとて
秋きりに立をくれぬと聞しよりしくるゝ空もいかゝと思

「一四オ

是はおなしくいみにこもり給ふ比さい院へわきて

此くれこそ袖は露け、れなとよみてまいらせ給

ひし返しのごとは也大内山をおもひやりきこえ

なからといへる心そのことはり一条禪閣の御説

は大將の直廬たいりなれは大内山といへりと

あそはされたり又の説宇多御門きた山の

大うち山にまし／＼ける時兼輔卿まいり給ひ

けるにたかき所にて雲の立のほりけるさまも

のさひしき御すまゐをみたてまつりて

しら雲のこゝのへにたつ嶺なれは大うち山といふにや有けん

とよみ給ひし其心もちて源氏の君の物さ

ひしくこもりおはするをかくいへりといふ義あ

り直廬をさしておほせらるゝもいかゝ又つきの

説もあまりもとめたる事にや又の説た、源

氏の君はうちすみのみし給ふ人なれは大内山を

とよみ給へるにやさとおはしますおりなどの

ふんへつなく大やうにあそはし給ふなるへしと云々

尤かんしん也

さか木

016 (三三六④) 賢木 1

神かきはしるしの杉もなき物をいかにかかへておれるさかきそ

是はみやす所の、みやにおはしましける時源氏の

君なか月七日はかりに尋まし／＼ての給ふへきこと

のはもかきりなればたゝいさゝかさか木をおり

てもち給へるをさし入てかはらぬ色をしるへに

てこそとの給ひし時みやす所の御うた也此哥

さらにきこえずやはは古今に

我宿は三輪の山もと恋しくはとふらひきませ杉たてる門

と明神の御哥也すきはたつぬへきしるしの心也

今の哥にしるしのすきもなき物をとは尋給ふ

へきしるしもなき物をといふ心也いかにまかへてお

れるさか木そとはさか木は時にあたりて源氏

のおりて入給へればとりいつるまてなりいかに

思ひまかへて尋給そとうらみいへる心なりたゝし

かくのこときのごとはり其身の所好によるへきか

017 (三四〇③) 賢木 2

十六にて故宮にまいり廿にてをくれたてまつ

り今卅にてまたこゝのへをみ給ふ

「一五オ

「一四ウ

「一五ウ

「一六オ

是はさいくう伊せにくたり給ふ時にし川よりうち

へまいる給ふとき御やす所もろともまいに給ふ

時心にみやす所おほす義なり十七にて秋このむ

生れ給ふ今卅にてといへはあきこのむは十四な

るへし源氏の君は廿二さいなり朱雀院の

立坊はけんしの君四才の時なりしからは朱雀

院のりうはう十九年になれり故先坊立坊

はるかのむかしたるへししかるをいま十七にて

故宮にまいるなどいへることおほきにさういせり

「一六ウ

かやうの事かうしやくのときふしんのともから

あらはのかれかたきもの也しよせんつくり物語なれ

はかやうの所をは唯此巻のことくになしてことをき

はめんとせさらんや可然侍らん一禪の御ちうに

も御ふしんはみえ侍りしかれともらくちやく

をおほせられすは、かりなからかくのことく大や

うにてやしかるへく侍らん

018 (三六九①) 賢木3

あを馬はかりそひきかへぬ物にて女はうなどのみ

ける所せうまいりつとひ給へるにかんたちめなど

「一七オ

みちをよきつ、むかひの大殿につとひたまふ

むかひの大殿は二条の右のおと、の御所なり

いまいへるは藤つほの三条の宮也むかひのといふ

事ふしんなり一禪に尋申侍しに二条は三条

のむかひなりと御ちうありくけんの義にあ

らすされとも花鳥の外なればこ、にしろし入

侍り

花ちるさと

019 (三八八⑦) 花散里1

御せうそこきこゆわかやかなるけしきともあまたし

「一七ウ

ておほめくなるへし

郭公かたらふ声はそれなからあなおほつかな五月雨の空

ことさらにたるとみればよしくうへしかきねもと

ていつるを人しれぬ心にはねたくもあはれにも思ひ

けり

これは源氏の君花ちる里へおはしましけるおり

中川のほとりにかねて忍ひてかよひ給ひし所

そと見給て

おちかへりえそ忍はれぬ時鳥ほのかたらひし宿のかきねにと

「一八オ

の給ひし返し也これみつことさらにうへしかき
ねもとていつる引哥に

花ちりし庭の木の葉もしけりあひてうへしかきねもみえすそ有ける

といふ哥をとりいて、いへりこれはことさらにたと

るとみれとこれみつか思ははや源氏の君に心の

かはりたてまつりけると思ふ心にてうへしかき

ねもそれともみえねはよしさらはとおもひすへ

るやうの心になふへきにや

すま

020 (四二六⑪) 須磨1

むまやのおさにくしとらする人もありけるをまして

おちとまりぬへくなん思ひける

駅長莫驚時変改一栄一落是春秋

馬屋のおさにくしとらするとは櫛にあらすこと

つてなるへし昔丞相なかされ給ひし時あかし

にて駅長なけきたてまつりし時此詩をつく

り給へりくしは口つからの詩也今大貳の方の

ものしをつくるには侍らねとあはれなること

つてなどの有をなすらへてくしといふにやま

「一九オ

しておちとまりぬへくなんおもひけるとは五せち
の君は源氏の御思ひ人なりしかは此うらにもと

まらまほしき心にこそ

021 (四二八⑭) 須磨2

いりかたの月かけすこくみゆるにた、これにしに行

などひとりこち給ひていつかたの雲ちに我もま

とひけんなどよみ給へり

た、これにしにとは是もおなし御作河海にみゆ

自然の理也月の西へめくるも我身の西都へ

おもむき給ふもかはることなき理にや其心をも

ちて源氏の君も此しをゑいして心をのへ給へると

やいふへからん

022 (四三三⑮) 須磨3

古里をいつれの春か行てみんうらやましきはかへるかりかね

さいしやうさらに立いてん心ちせて

あかなくにかりのとこ世を立わかれ花の都にみちやまとはん

おりしも春の空なれはわかる、かりによそへ

て源氏の君の哥の侍れは又さいしやうの哥は我

みやこへ行身なれはかりを我身になすらふによ

りてこ、をわかるれはやかてとこ世といひなせり

「一九ウ

「二〇オ

あかし

023 (四四七①) 明石1

君は思召まはずに夢うつ、さま／＼しつかならずさ
としのやうなること、もをきしかたゆくすゑのこ
らすおほしあはせて世の人のき、つたへん後の
そしりやすからざるへきをは、かりてまことの神の
たすけにもあらんをそむく物ならば又是よりまさ
りて人わらはれるめをやみんうつ、の人の心たに
猶くるしはかなきことをもかつ見つ、我よりよは
ひまさりもしはくらゐたかく時代のおほえいま一

「二〇ウ

きはまさる人にはなひきしたかひてその心むけを
たとるへき成けりしりそきてとかなしとこそむかし
のさかしき人もいひをきけれけにかく命をきはめ
世にまたなきめのかきりをみつ／＼つさらの
ちのあとの名をはふくとでもたけきこともあらし
夢のうちにもち、みかとの御をしへ有つれば又何
事をかうたかはんとおほして

一禪の御註にはうつ、さまにとは世のつねさま也
なをさりのよのつねの人なりとも神のたすけを

「二一オ

そむかんはくるしかるへしいはんや我身の有様はか
なきこと、もを見あつめたることになりては世
にしたかふへきはよからんと也是は我身をよの
つねの人にてもなき身その御註なりもつ

ともをもしろくやた、し師説はうつ、の人の心た
になをくるしとは大方の人のいはんことたにそむ
かんはくるしかるへしまして誠の神のたすけ
にもあらんをそむきなはあしからんとおほしとる
心なり時代のよせい一きはまさる人にはとは明

「二一ウ

石の入道のかしこき人にて申事を心にこめて
おほす義也しりそかさればとかありといふほん
もんありまつ入道のみちひくにまかせて彼
うらにうつりいよ／＼朝家をうやまふへきの
御心にや侍らん

024 (四六〇③) 明石2

思ふらん心のほとややよいかにまたみぬ人のき、かなやまん
此哥はあかしのうへに源氏の君文つかはし給ひしに
返事なかりし後かさねて

いふせくも心に物を思ふかなややよいかにととふ人もなみ

「二二オ

とよみてつかはし給ひし時あかしのうへの返し哥也

此うたの心そのことほりきこえすおもふらん心の程

ややよいかに此かみの句はかく数ならぬ身にかゝ

る御せうそこのあるをうたかひて思ふらん心の

ほとややよいかにといへりまたみぬ人のきゝかな

やまんとはよそ人もこれをきかは入道のむすめ

にかゝる文などのあるは有ましき事にもと人も

やきゝなやまんといふ心にや侍らん又源氏の君

の心にものをなやむかなとあそはしたるをうけて

「二三ウ

またみ給はぬ人のきゝなやみ給はんことをさも

あらしなどおほめきたる返事にやと云

025 (四七七⑦) 明石3

明石にはかへるなみにつけて御文つかはす

なけきつゝあかしの浦の朝霧のたつやと人を思ひやるかな

此哥の心は源氏の君あかしより船にてのほり

給ひしかは明石のうへはるかなかめをくりて心

のうちをおほしやる哥也人丸か鳥かくれ行舟を

しそ思ふとよめる哥は明石のうらにして思ふ

人のこきいてしなこりをしたふ哥なれば明石の上

「二三オ

唯今の心人丸か心とひとしかるへきをおもへる心に

やたつやと人をとほ折ふし秋のなかはのわかれ

ちなればあさきりも立へき比にてあかしの

うへのなかむらんおりふしきこそとおほす心

なるへし

ゑ合

026 (五六四⑩) 絵合1

此人まのとりにろんするをきこしめして左

右とわかせたまふ

一禪の御説ゑ合は二度ありはしめは先梅

「二三ウ

つほの御かたにてうちの御ゑにあはせ給へり後

のは御殿にて梅つほの女御とこきてんの女御

の御ゑにあはせ給ふ也此御ちうさういある

へからすたゝしうちの御ゑとみえたる所おほ

つかなしうちの御ゑならはみきにはいかゝなさる

へきや是又おほつかなしいかん後のゑあはせは

まきれなし此比は源氏廿九さいの比かい

せんのゑ合もうちゝの儀ながら梅つほと

こきてんの女御の御ゑをうす雲の女院の御

「二四オ

方などにてあはせられけるとやいふへからん

松風

027 (五八五⑫) 松風1

しはしかゝる山かつの心をみたり給はかりの御ちきりこそはありけめ天にむまるゝ人のあやしき三のみちにかへらん一時におもひなすらへてけふなかくわかれたてまつりぬ

此事まことにことほりおほつかなし天に生

人も先生などは三つにまよふ人のしせんに天上にむまるゝこともあるへきかそれも又三途

「二四ウ

にかへることもあるへくや一時といへるは其きさみのことならんかたとへはあかしのうへを先天人になすらへて明石のあまの腹にやとるを三のみちにかへる時になすらへいへるにや又天上にのほることもあるへきの心を都へかへるになすらへてなかくこゝをはなるゝ理にあたるへきかかくやひめは月中の天人なりしかとかりに此世界にきたりて竹とりの子となりしかと八月十五夜の月に乘し

「二五オ

てなかく竹とりか家をはなれしことなんとになすらへてみ侍るへくや

028 (五九四⑬) 松風2

こよなしやわれも思ひなきにしもあらさりしをなんとあさましようおほゆれといまさらにとうちけさやきてまいりぬ

是は右近丞の藏人源氏の君き京のゝちゆ

けいのせうにてかうふり給へるか源氏の君明石のうへのほりてはしめて大井へおはしましける時の御ともにてまいれるか御帰りのとき御

「二五ウ

はかしとりにまいれるかあかしのうへの女はうにいろくゝのことなど語て立出る時心のうちに おもふことなりこよなしとは明石上はよしきよか心をかけていひし人なるを源氏の御子をさへまうけてあかしよりのほりそのさまのかりなきいきほひのあるをみて思へる心也こよなしやとは其身のくはほうをほめたる心也我も思ひなきにしもあらさりしとはよしきよか心かけしことをきゝておとこの心なれば

「二六オ

我もその思ひありしことをいま思ひいてたる
義也これをよしきよと花鳥にあそはされた
るはもしおほしめしたかへけるにや

うす雲

029 (六二九⑬) 薄雲 1

これはいとにけなきこともおそろしうつみふかき
かたはおほうまさりけめといにしへのすきは思ひ
やりすくなきほとのおやまちに仏神もゆるし
給けんとおほしさますもなを此みちはうしろやす
くふかきかたのまさりけるかなと

「二六ウ

是は秋このむ中宮六条院の御方におはしま
す時源氏の君まいり給ひて思ひかくるすち
の事なとほの聞え給ひし時のこと也これは
いとにけなきことなりとはすてに時のみかと
の中宮にておはしませはなりつみふかき方
はおほふまさりけめと、はち、みかとの時うす
雲の女院に忍ひかよひ給ひしこと也され
はおそろしさもまさるへけれと年わかき時の
とかは神仏もゆるし給ひけるやの心也うしろ

「二七オ

やすくふかきかたのまさるとは年をへてえんり
よなと出きぬると也

あさかほ

030 (六四九⑤) 朝顔 1

いひこしほとになんときこえかゝるまはゆきよい
ましも来ん老のやうになとほ、ゑまれ給ふ
身をうしといひこし程に今はまた人のうへにもなけくへきかな
此哥の心は我身のやうくおひとなることを
なけきこしにその比わか、りし人の又この比老
となるをみて人のうへともなりにけるかなと源

「二七ウ

内侍かいへる也是を源氏の君き、給ひて人の
身のおひぬることの程なさは世のさかにて侍を源
ないしか今しもきたるおひのやうにいへるをはか
なく思ひ給ふ心なりおよそ此哥の心をいま
内侍かいへるさしあたりても心えかたき事也

玉かつら

031 (七二六⑩) 玉鬘 1

君にもし心たかは、松らなるか、みの神をかけてちかはん
是は大夫のけんかせうにの北のかたの所にきた
りて玉かつらの君のことを思ひかけてよめる哥也

「二八オ

おは君の返し

032 (七二六^⑭) 玉鬘²

年をへていのる心のたかひなはか、みの神をつらしとやみん

よめる心は年月此玉かつらの事をいかにもして

都にのほせたてまつり父おと、にもみせたてま

つり又しかるへき人にもあはせたてまつらん事

をいのりこしにその心のたかひなは神をつらし

と思はんといふ心也なにとなくかくよめるをけん

か心に我にあはせしとすることそとき、ていみ

しういかりておは君にとりか、らんとしけるほ

「二八ウ

とにむすめとも此哥のことはりをつけかへてけ

むにいひきかせける也その心は此姫君かたわの

あるよしかねていひちらしてをきけることをた

よりにしていへりその心はいかやうなるよきえん

にもなんととしをへて神仏にいのりこしに大夫

監のかく心かけ給ふはうれしき事なるを此ひめ

君の人にみえ給ふへきやうもなきことのあるをき

こえひかめてよめるよしをいひきかす也

033 (七三二^⑮) 玉鬘³

仏の御なかにはつせなん日のもとのうちにあたら

「二九オ

なるしるしあらはし給ふともろこしにたにきこ

えあなりまして我国のうちにこそとをき国のさ

かひとてもとしへ給へればわか君をはましてめくみ給

てんとていたしたてまつる

此こと葉のうちまして我国のうちにこそとは日

本の心也とをき国のさかひとでもおなし日のも

とにおはしませはわか君おはしましてめくみ給

てんといへりとしへ給へれはといふうちになしひ

をつくすやうの心あるへきか又そのあいたにく

はんをんをたのみたてまつる心もあるへしされ

は我君をはましてめくみ給はんといふにや河

海にはつせは房前卿のちからにてこんりうあ

れはといへりそれならでもことはり侍るへきにや

はつね

034 (七七五^⑯) 初音¹

れいのわたかつきわたりてまかてぬ夜あけはて

ぬれは御かた／＼かへりわたり給ひぬ

是は踏歌の人六条院へもまいりし時御かた／＼

ものみ給ひけるよさうのたいわた殿などに御つ

「三〇オ

「二九ウ

ほねしつ、おはずにしのたいの姫君はしんでん
のみなみの御かたにわたり給てこなたの姫君
に御たいめんありけりあげぬれはかへりわたり給ふ
とは物みはて、の事也

035 (七七六⑥) 初音2

このすゑに人まこなたへつとひ給へるつゐてにい
かて物の音心みてしかなわたくしの後宴あるへし
との給て御こと、ものうるはしきふくろともしてひ
めをかせ給へるみなひきいて、
つとひ給へるつゐてにも、音心みてしかなと

「三〇ウ

あるによりいせんかへり給ふといふことふしんなり
た、大方にそれより思ひ立給て女かくの事
有けるとみ侍れはことなるふしんなきにや
此もの見のたよりより御ちなみもむつましくなり
けるにや

こてふ

036 (七八一①) 胡蝶1

春のおまへの有様つねよりことにつくしてにほふ
花の色とりのこゑほかの里にはまたふりにぬにや
とめつらしうみえきこゆ

「三一オ

かくいへるはむらさきのうへの御かたの事也ほかの里
にはまたふりにぬにやといふことはこ、ははやふり
たるといふやうにきこゆ是またふしんなきに
あらずた、外の里にはあまねからぬにやとい
へる心なるへし然は春のおと、によるつとい
ろふしと、のふ心侍るへき也

037 (七八二⑫) 胡蝶2

風ふけは浪の花さへいろみえてこやなにたてる山ふきのさき
此山ふきのさきといへるふしんの方あり名所
などにはみえすこそしまかさき山ふきの花な

「三一ウ

と、よめるも侍れは山ふきのさきともいひや
侍らした、しまた名所にや

038 (七八五④) 胡蝶3

おなしかさしをたてまつれ給ふ
一禪の御注には兵部卿はれんしにおはしませはお
なしかさしとのたまふ也た、しいたう空みたれし
て藤花をかさしてなよひさうとき給ふとあり
そのおなし花をたよりにておと、の君にさか
つきたてまつり給へるにや

か、り火

「三二オ

こよひはさかつきなと心してをときかりすきたる
人は多ひなきのついでに忍はぬこともこそとの給へ
は姫君もけにあはれとき、給ふ

是は玉かつらのかたに源氏の君おはしたるおり
姫君のはらから頭中将弁いけ三人ふえふき
なとし給へるをよひ給ひて物語なとせさせ

給ふ時の事也また此姫君をわかはらからとも
此三人はしり給はぬを源氏の君多ひなきのつ
ゐてに忍はぬこともこそとの給へはあはれ此つ

「三三二ウ

てにうちもいて給へかしとひめ君のおほす心を
あはれとき、給とかけり下の詞にもたえせぬ中
の御ちきりをろかなるましき物なれはにや此
君たちをめにもみ、にもと、め給へりといへり

野わき

みつしによりてかみ一まき御硯のふたにとりを
ろしてたてまつればかたはらいたしとの給へときた
のおと、のおほえを思ふにすこしなのめなる心ちし
てふみかき給ふ

「三三三オ

これはのわきのあした明石のひめ君のかたに
夕きりの君おはしたるつゐてにふみかき給て
むとてこひ給へるにとりいてたるをいなこれは
かたはらいたしとはひけの心也されと明石の
うへの是をき、ていたしたるかみにかき給はず
はふみやり給かたの人させる人にもなきやと
おほさんとおほす心也北のおと、はあかしのうへ
のおはするかたなり又いはくかたはらいたしと
はすこしれいきの心也されともあかしのうへのほ

「三三三ウ

とをおほすにのめにおもひなしてあそは
しけるにや

かたの、少将はかみの色にこそと、のへ侍りけれと
きこゆさはかりのいろもおもひわかさりけりやいつ
このへのほとりの花よなんとかやうの人々にも
ことすくなにみえて

かたの、少将とはは、き木の巻にいへる人なり
かみのいろにと、のふるとはふみつくへき木草
いつれもかみのいろなる花にても何にてもつ

「三四オ

くへきこと、みゆさはかりの色も思ひわかさり
けりやとは我身の卑下なりいつくの野への
花よとはいかなるにつくへきやとかへりていひ給へ
る心にや一禪の御ちうにはいつくのへの
ほとりにて有しやらんか、る色したる花
はありしとはおほめきこたへ給へるなり夕き
りの心にはかならずしもしかるへからすなに、
てもその時にしたかひたる花につくへきと
思ひ給へるにやと侍りいか、侍るへき

ふちはかま

042 (九二〇⑩) 藤袴1

おなしの、露にやつる、藤はかまあはれはかけよかことはかりも
此哥は夕きりの御おは大宮うせ給ふて後玉
かつらの君のかたへ六条院の御つかひにお
はしたるそのおりすこし思ひかくるけしきを
みえて此うたをよめりおなしの、露にや
つる、とは我も玉かつらも大みやのまこに
ておなしのみをおひ給へはおなし房にやつ
る、とはふちのやつれをそへて我おもひをあ

「三四ウ

「三五オ

はれはかけよといへる也玉かつらは源氏の君
の御子に心え給へれはきやうたいの心にて
ふちはかまをそへいへり御返し

043 (九二〇⑬) 藤袴2

尋ぬるにはるけき野への花ならはうす紫やかことならまし
きやうたいにはおはせとまことにはいとこに
てまませは也さるによりよくたつぬれはと
をきゆかりの心にてたつぬるにはるけき野
への花ならはといへりうすむらさきやかこと
ならましとはいともおなしゆかりなれは

「三五ウ

うすむらさきといへりかことはゆかりをたのむ
へきたよりの心なりかこち草のことはりなり

044 (九二三⑪) 藤袴3

女は三にしたかふものにこそあなれとはつるてを
たかへてをのか心にまかせん事はあるましきこと也
との給ふ

是は源氏の、給ふことは也玉かつらは我御子に
し給へれは三しうのことはりはもちろんなれ
とまことは致仕のおと、の御子なれはしたいを
たかへて我ま、にはすましき心なり

「三六オ

やことなきこれかれ年比をへてものし給へはえそ
のすちの人かすにはものし給はてすてかてらに
かくゆつりつけ大そうの宮つかへのすちにらうろふ
せんとおほしをきつるいとかしこくかある
ことなりとなん申されけるとたしかに人の語
申侍りし

これは玉かつらのち、おと、ののたまへることを
源氏の君に夕きりの語申さる、也やこと

なきこれかれとは源氏のせつにおほすかた

をは、かりて宮つかへにまいらせんとし給の心
也らうろうとは身を心にまかせてもたぬ心也

これ宮つかへの儀也

まきはしら

けにそこら心くるしけなること、もをとりくにみしか
と心あさき人のためにそてらのけんもあらはれける
是はひけくろのおと、の心なりいふ心はひけく
ろの本きたのかたのもの、けにとし比わつ
らひ給へるに石山のくはんをんをたのみていのり給ひ

「三六ウ

「三七オ

しかとしるしなかりき又玉かつらをわかもの

にせんと心かけ給ひし時おなし御寺にいのり
給へはことかなひける後おほしあはする心なり

心あさき人とは玉かつらの心たてのやすらかに

またあはれもふかく思ふやう成を仏もまもり

給ひけるとひけくろの思へる心也又いはく心

くるしけなること、もとは玉かつらに心かけし

人々の事也心あさき人とはひけくろの事也

ほたるのみやいはもる君などのやうにはあらて

心あさき人といへるにやひけくろにさたまり

給へる事也ひけくろの北のかたのこと、に

は見えざるにや

みつせ川わたらぬさきにかてなを涙のみをのあはと消なん

此哥は玉かつらひけくろにあひ給ひてのち

源氏の君くやししくおほす心ありし比

おり立て波はみねともわたり川人のせとはたちきらさりしを

とよみ給へりそれを玉かつらいたうはつかしくお

ほすあまりにわたらぬさきにかてなをきえなま

「三七ウ

「三八オ

しとよめる心也みつせ川はかきりある時のわた
りなればたゝいまのかなしさにわたらぬさきにとは
いへるなり御手のさきはかりはなといふ事此つきの
ことにはあり

梅かえ

048 (九七七⑥) 梅枝 1

花の香はちりにし枝にとまらねとうつらん袖にあさくしまめや

此哥はさい院よりたてまつらせ給梅の花ちり
すきたるにつけ給へりうたの心もひけの心な
るをうつらん袖にあさくしまめやといへるはたき

「三八ウ

物のにほひふかきやうにきこえ侍れは心得

かたく侍るゆへに源氏の君の袖をしやうく

はんしてその袖にふかくしむへしとは心さしの

ふかき義なるへし古今の哥に

せみのはよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひけるかな
といへる哥は心さしのふかきことをいへはその心
にや侍らん

049 (九八一⑨) 梅枝 2

花のかをえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん
えならぬ袖といへるは我そての事にてはいかゝとお

「三九オ

ほえ侍れとまへのこと葉にみつからのれうの御
なをしの御よそひくたり手ふれ給はぬたき
物なとあれはそれをかけてよめる也下句はあらは也

050 (九八三⑤) 梅枝 3

左大臣殿の三の君まいり給ぬれいけいてんとき

こゆ

是は此すゑにやとり木の巻にこんしやうの女

二宮の御は、ふちつほの女御またとうくうの

御時よりまいり給ふとあり此れいけいてんたる

へきかおはします所の名なんとあひかはる事

もとしへし後なれはあるへきにや

「三九ウ

藤のうら葉

051 (二〇〇二⑨) 藤裏葉 1

とうの中将の花のいろこくことにふさなかきを折

てまらうとの御さかつきにくはふとりてもてなや

むにおと、

紫にかことはかけん藤の花まつよりすきてうれたけれとも

むらさきにかことはかけんとは夕きりの君われに

心さしなくて年比へしことはつられれとその

うしろみをは我姫君にかけたてまつらんとひけして

「四〇オ

の給へるなりむらさきを女のことにいへることつ
ねの儀なり

052 (一〇〇三⑤) 藤裏葉2

弁の少将こゑいとなつかしくてあしかきをうたふお
と、いとけやけうもつかうまつるかなとうちみた
れ給てとしへにける此家のとうちくはへ給へる
御こゑいとおかし

けやけしはもつともといふ字也心はおりにあふ義
也此すゑに

053 (一〇〇四⑥) 藤裏葉3

あしかきをもむきはみ、と、め給ひつやいたきぬ

しかな川口のとこそいはまほしかりつれとの給へは

あしかきの哥を弁の少将のうたふ心は此哥

のことはたれかこのおやにまうよこしまうし

てと侍ことはあり夕きりのつゐにおと、の心を

とり給事もなきにこなたよりまけ給へる事

くちおしくおほしておやに申てといふことはのあ

る哥をうたへり其心を夕きりさもなき事そと

思ふにより川口のとこそさしいらへまほしかりつ

れとの給その心は 川口のせきのあらかきまもれ

「四〇ウ

「四一オ

ともいて、我ぬぬやなといふ哥あれはまもれ共
といふことはにつきてかくいへるなり一禪の御
ちうおなしうたひのことはなからすこしあひか
はれり

わかな上

054 (一〇三八⑩) 若菜上1

また大納言朝臣の家つかさのそむ成さるかたに

ものまめやかなることにはあれとさすかにいかにそや

此大納言の事たれともみえず

055 (一一〇九②) 若菜上2

ひたふるうちはなやきされはめるはいとおほく

かすしらぬまでさふらひつ、物思ひなけなる御あ

たりとはいひなから

是は女三の宮かたにある女はうのた、すまる也

056 (一一〇九④) 若菜上3

何事ものとやかに心しつめたるは心のうちあらは

にしもみえぬわさなれば身に人しれぬ思ひそひ

たらんもまたさらに心ちゆきけにと、こほりな

かるへきにしもうちまされはかたへの人にひかれつ、

おなしけはひもてなしになたらかなるを

又さらにといふよりおなし女はうの中にもしち

「四一ウ

「四二オ

ならぬ人のさまなりそれに心しつめたる人も
うちましれはおなしけはひになりてしちなら
ぬやうにみゆることあるをなたらかなるとはいふ
なりあしきにしたかふ心なり此ふたつは世上
のことはり也

057 (一一〇九⑦) 若菜上4

た、あけくれはいはけたるあそひたはふれに心い
れたるわらはへのありさまなどゑんはいとめにつか
すみ給ふ

是も女三の宮の女はうのさまなりわらはと侍

「四二ウ

れといつれもそうの女はうにわたる心なるへしさる
によりめにつかすみたまふとはかけるなり

わかな下

058 (一一三九⑩) 若菜下1

昔こそまつ忘れね住吉の神のしるしをみるにつけても

此さくしや人のふしんありすみのえをいけるかひ

あるなきさとはとまへにあかしのあま君よめり

これもおなしさくしやなりひとりこちといへるに

てあらはなり

059 (一一四〇③) 若菜下2

たかむらのあそんのひらの山さへといひける雪の朝あした

「四三オ

ひもろきは神の心にうけつらんひらの山さへゆふかつらせり
此哥は文時卿の哥也た、したかむらか哥と此物
語にはみゆかやうのさういつねにあることなりこの
物語にてはたかむらか哥ともちゆへし

060 (一一五〇⑧) 若菜下3

春の琴の音はみなかきする物なるをみたる、こ
ともや

ふるきちうにもその心みえすさる物と琴のねは
いふ本もありとやいつれにもふしんこれありた
つぬへしある人のれうけんにはく春はやうの

「四三ウ

時にてうきたつ心あり秋冬はいんにて心もし
つまる時なり物をまなふるもその儀ありされは
春の琴の音はみたる、こともやといへるにやか
きあはするかくにみたれてはいか、となるへし隔
句にいへるにや

061 (一一五六①) 若菜下4

けに律をはつきの物にしたるはさもあるかしなと
のたまひて

ほんてうには呂律ともちゆさいはら是におなし

唐には律呂といんをさきとす

「四四オ

062 (一一六〇⑥) 若菜下5

きんは五かのしらへ

河海にしるせり尋ぬへし

063 (一一六〇⑦) 若菜下6

五六のはち

たうしきんのことのつたへこれなし又尋ぬへし

064 (一一六三⑧) 若菜下7

ことしは三十七にそなり給ふ

源氏の君当年四十七さいとみゆしからは紫上

は四十たるへしされとも物かたりのならひその

人をさかりにいひなす心つねのことにやあるせつ

あふひの巻の三か夜のことむらさきのうへ十二と「四四ウ

いふ儀ありた、しもみちの賀に十にあまる

人のひいなあそひはいむよいへりなをにるまくら

は十四なるへしかほるは兵部卿の宮にひとつのお

と、なれとうきふねの巻にいたりて宮より二三

のこのかみといへり此たくひなるへし

065 (一一八〇⑨) 若菜下8

おきてゆく空もしられぬあけくれにいつくの露のかゝる袖也

此哥のてには有先賢のかうしやくにもてにはちか

へりしかはあれとそのゆへあるよしいへるにやた、

し後撰集千載大和物語等にも此たくひの

「四五オ

てにはあり

涙川なかさねさめもある物をはらふはかりの露やなになり

思ひいて、をとつれしける山ひこのこたへにこりぬわれやなになり

ゆ、しとていみける物を我為になしていはぬはたかつらきなり

しよせん此てには聞にくきやうには侍れと五

いんにてさういなきかむかしはみなかくのことくあり

けるよし心うへきものなり

066 (一一八九①) 若菜下9

かゝるおりのらうらうならすはまいるましくけは

ひはつかしく

「四五ウ

是はゑもんのかみ女三宮に忍てあひ給へりし

後心のおに、源氏のかたへまいる給はざりし比紫

上のもの、けにうせ給へるよし聞てまつりのかへさ

みにいて給ひしつるてに二条の院へまいられ

ける時かしは木の心なりらうらうは人のおちめ

なんとのことをいへは源氏の君のうれへの時まいる心

をいへるにや

かしわ木

067 (一二六四③) 柏木1

右しやうくんかつかに草はしめてあをしとうちく

「四六オ

ちずさみてそれもちかき世のことなれば

天興善人吾不信右將軍墓草初秋

これは時平のおと、の御子保時を右將軍と

いへり其人うせ給ふとき此しはつくりそれ

秋のことなりしをいまゑもんのかみのことをおもふ

に夏なれば草はしめてあをしと紫式部か

きかへたりゑもんのかみのから名はきんこしやうくん

といへはさういなきなりそれもちかき世のこと、

いへるはかの保時の比とをからさるゆへ也此事花鳥

「四六ウ

にありた、しこまやかならす有せつ此しはほ

んらい草はしめてあをしとありと云また

つまひらかならすこれを尋ぬへし

068 (一二五二⑦) 柏木2

我御とかあることはあへなんふたついはんには女のた

めにこそいとおしけれとおほしているにもいたし給

はず

かほるむまれし比女三宮と我御事とをならへ

てかく源氏のおほす心なり

夕きり

「四七オ

069 (二三五九⑧) 夕霧1

またしらぬ世かなにく、めさましと人よりけにおほ

しおとすらん身こそいみしけれいかて人にもことは

らせんといはんかたなしとおほしての給へはさすかに

いとをしくもあり

是は夕きりの大将おちはの宮をやまとのか

みにいひあはせて一条の宮にしてその心さしを

とけんとおほしたりしを宮いみしうき物に

おほしてさらにうちとくへくもおほせさりしこと

をなきて少将といふ人にうらみての給へる事也

「四七ウ

またしらぬ世かなとはつれなさのたくひなきこ

とをいへる心なりいかて人にもことはらせんと

はふたりの中のことはりを世にとはまほしき心也

少将これをき、てさすかにいとおしうもあり

とは少将の心也

070 (二三五九⑩) 夕霧2

けにこそことはりは何方にかはよる人侍らんと

すこしうちわらひぬ

是は夕きりの宮の難面を人にことはらせんと

いへる心をうけて少将のいへることは也これをこ

「四八オ

とはらせはいつかたにかはよる人侍らんとは宮と
夕きりとのことをいつれことほりそとかいはん
といふ心也けにといふことはあまたありてま
きる、やう也

みのり

071 (二三八六⑩) 御法1

かたくにおはしましてはあなたにわたらせ給はん
もかたしけなしまいらんことはたわりなくなり
にて侍れはとてしはしはこなたにおはすればあか
しの御かたもわたり給て心ふかけにしつまり

たる御物かたりきこえかはし給ふ

是は中宮をしんでんにてまちきこえ給ひけ
るおりふしの事なりあなたにわたらせ給は
むもかたしけなしとはむらさきのおはしますに
しのたいへ中宮のわたらせ給はんはかたしけな
しといふ心なりまいらんことはたわりなくなり
にて侍れとは中宮のひかしのたいにましますへ
ければそなたへまいらんこともわりなしといへり
心ちのわつらはしきおりの心也

「四八ウ

「四九オ

072 (二三八七⑨) 御法2

みときやうなどによりてそれいのかかたにわたり給
みときやうとは季の御読経のこと也此とつ経
しんでんにてあれは紫のにしのたいへわたり
給ふこと也

073 (二三九六⑬) 御法3

うす、みとの給ひしかとこまやかにて
これはあふひの上その巻にうせ給ひし時源氏
の君の御ふくの時の哥に
かきりあれはうす、み衣あさけれと涙そ袖をふちとなしける
かきりあれはとははつとのこと也いま紫上のう

「四九ウ

せ給ふときにうす、みなるへけれと心さしのせつ
なるによりこまやかにそめ給へりさるによりう
す、みとの給ひしかと、はかけり
まほろし

074 (二四〇四⑭) 幻1

あちきなのわさやと思ひ給へりしけしきのあはれ
なりしなかに雪ふりたりしあかつきに立やす
らひて我身もひえいるやうにおほして空のけし
きはけしかりしにいとなつかしうおいらかなる物から
袖のいたうなきぬらし給へりけるをひきかくしせ

「五〇オ

めてまきはし給へりしほとんどのよいなとをよ
もすからゆめにてもまたいか、ならん世にかとおほしつ、
けるあけほのにもさうしにおる、女はうなるへし
いみしうもつもりにけるかなといふこゑをき、つけ
給へるた、そのおりの心ちするに御かたはらのさ
ひしさもいふかたなくかなし

これは女三宮むかへ給ての三か夜雪ふりたりし
あか月かへり給ひけるおりしもむらさきのうへの
すこしぬれたる御ひとへの袖をひきかくして

うらもなくなつかしきものからなと侍しことを
あかぬなごりのかなしみにおほしいつる心也

075 (一四〇八④) 幻2

三の宮をそさうくしき御なくさめにはおはしま
させ給けるは、の、給ひしかはとてたいのまへのこう
はいはいととりわきてうしろみありき給ふをい
とあはれとみたてまつり給ふわか宮まつかさくら
はさきにけりいかに久しくちらさし木のめぐりにき
ちやうをたて、かたひらをあげすは風もえふきよ
らしとかしこう思ひえたりと思ひての給ふ

「五〇ウ

「五一オ

此二のむめさくらの事は二条院にてこの宮に
紫上さるへきおりは仏にもたてまつれ給へなど
の給ひし事也いまかくいへるは六条院にての事
なり二条院より六条院へうつり給へるほといつ
ともみえずされとも六条院にても三宮のお
さな心ちに二条院にてむらさきのうへの、給ひし
事をこ、も又紫上のすみ給ひしかたなれば
おほしけるにや

076 (二四二四⑥) 幻3

かりかゝるしなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけをたにみす

「五一ウ

是は紫上うせ給ひしよりいつちにも立いて給ふ
こともなかりしをあかしのうへのかたへおはして夜
ふくるまで御物語などし給てかへり給ひける
あしたに

なくくも帰りにしかなかりの世はいつくもついのとこよならぬに
とよみてつかはし給ひし返し也此哥心得かた
くやかりかゝるしはかりの世はとあるそのことはのたよ
りはかりなりなはしろ水のたえしよりとは紫上
うせ給ひし心にやうつりし花のかけをたにみすと

「五二オ

はそのわかれよりは源氏の君あかしのうへにもかよ

ひたえ給ひし心をかけをたにみすといへるにや

077 (二四一五⑨) 幻4

あふひのかたはらにをきたりけるをよりにとり給ひ

ていかにそや此名こそわすれにけれとの給へは

さもこそはよるへの水にみくさぬめけふのかさしよ名さへ忘る、

とはちらひてきこゆ

是は紫上の女はう中将の君とていとわかきか

紫上あはれなる物におほしける人なるへし源氏

の君も物いひ給ひける人なり此人ひるねうちし

「五二ウ

て侍りけるをかたはらのあふひをとりにいかにそや

此名こそ忘れにけれとは紫上の思ひの後中将

にも物いひ給ふ心もなかりしをいへる詞也中将

のうたの心けふのかさしよ名さへわする、といへる

をあふことに心えぬれはにく、もなり侍へしよる

への水にみくさぬるとはよるへはたより也みくさ

るはあせたる心也紫上うせ給ひてのちはけふ

のかさしの心をも思ひいれられぬゆへになさへわす

る、といへりなけきの心なるへし定家卿の僻

「五三オ

案抄にもよるへの水の事みえたり

078 (二四一六⑤) 幻5

雨にそひてさとふく風にとろろもふきまとは

して空くらき心ちするにまとをうつこゑなとす

むし給へるもおりからにやいもかかきねにをとな

はせまほしき御こゑなり

ひとりしてきけはかなしき郭公いもかかきねに

此引哥にてかけることはなれとも今いへる心はむ

らさきのうへをおきて源氏のた、いまのこゑを

きかたてまつらまほしきの心也

「五三ウ

079 (二四一四⑫) 幻6

なつの御かたより御衣かへの御さうそくたてまつり給ふ

夏衣たちかへてけるけふはかりふるき思ひもす、みやはせぬ

是は紫上うせ給てつきのとし六条院へまいらせ

させ給ふうた也ふるき思ひもす、みやはせぬとい

へる心紫上の思ひのこと、いはんも心あたらず心

えかたきにや侍らんとへは此心はむらさき

のうへの、ち六条院の御なけきせつなるま、に

いつれのかた／＼も思ひたえ給へる比たより

なく心ほそきさまにおはしますま、に御さう

「五四オ

そくまいらせ給ふついでにわか身の事をけふ
はおほしもやはいてぬなといへるにや此花ちるさ
とは心たてやすらかに思ふことなをもあはれに
の給へる君にてかくよめるにや侍らん

にほふ宮

080 (一四三三⑤) 匂宮1

二月に侍従になり給秋うこんの中将になりて
御たうはりのかゝゐなとをさへ

此かゝゐは院の御給にて四位になり給ふこと成
へししゝうもはなれ給はずと竹川にみえたり

「五四ウ

081 (一四三七⑭) 匂宮2

十九になり給ふ年三位のさいしやうにてなを中
将もはなれす

其後のりゆみのかへりあるしの時もさいしや
うの中将とみゆ大かたふしん侍らねと此まき
こうはい竹川はし姫しゐかもとまでさいし
やうの中将とみゆ此五巻いりみたれてみわ
けかたきゆへかく注し侍也

こうはい

082 (一四四七①) 紅梅1

其比あせちの大納言ときこゆるはちしの大

「五五オ

の二郎なりうせ給ひにしゑもんのかみのさしつき
なり

此まきのうちに源中納言とかほるをいへりせう
しんのしたい竹川にみゆ夕きりは左大臣にあか
り給ふ此まきのはしめあせちの大納言は
右大臣の左大将也しかるを此まきに大納言
とかけるまたふしんなりいかゝ

083 (一四五八⑧) 紅梅2

かよひ給ふ忍ひ所おほく八の宮のひめ君にも
御心さし浅からていとしけうまふてありき給ふ

「五五ウ

是は兵部卿の宮のことなりはしひめのすゑ
しゐかもとの巻の時分にあたるへし

竹川

084 (一四六三①) 竹河1

是は源氏の御そうにもはなれ給へりしのちの大
殿わたりにありけるわかこたちのおちとまりの
これるかとはすかたりしをきたるは

是は源氏の御そうにもはなれとは源氏の君の
しそんにあらずといふ心也のちの大臣わたりと
はちしのおとゝのゝちひけくるの太政大臣に

「五六オ

なり給へるをいへり

085 (一四六三②) 竹河2

むらさきのゆかりにもにさんめれと

玉かつらのことをそこにもちてかけることは也

そのゆへはむらさきのうへも玉かつらも源氏

の御子のやうになりおはしましたりしかなど

紫上はのちにほんたいになり給へり玉かつらも

すこし源氏の忍ひにあひ給ふ事はありし

かとうへにはそのよしみえすしてひけくろの

おと、のしつになり給へることをいはんため也

さるによりわたるこたちのとはすかたりしたると

はいへりむらさきの上になすとは玉かつらの事也

086 (一四六三③) 竹河3

源氏の御すゑくにひかこと、ものましりてき

こゆるはわれよりは年の数つもりたりける人の

ひかことにやとあやしかる

あやしかりけるといふはいまのわたるこたちかあや

しかりけるなるへしいつれかまことならんとかけ

るむらさき式部か心なり此まきはしめこ、まて

さらにふしんをはるけかたき也これまては紫式

「五六ウ

部かわか身はよからぬことにしるせる詞ともなり

087 (一四六六④) 竹河4

れんせい院に御子のやうにおほしかしつく四位

のし、うそのころ十四五はかりにていとときひわ

におさなかるへきほとよりは心をきておとなく

しくめやすく人にまさりたり

是はかほるのゆくすゑをしるし侍らんためまつ

かきしるせり是はかほる中将の巻のはしめ比也

088 (一四九〇⑫) 竹河5

一夜の月かけははしたなかりしわさかな藏人の少将

の月のひかりにか、やきたりしけしきもかつらのか

けに侍るにはあらずやありけん雲のうへちかく

てはさしもみえさりきなどかたる

是はおとこたうかの侍し時四位のし、う哥頭

にて右のおと、の御子藏人の少将もその人数

にてれいせん院へまいりたりしそのことをかほる

し、うの院の女はうにたうかの事をかたり給ふ

ことは也月のひかりにか、やきたりしかとは少将も

かたちよき人なりされとかつらのかけに侍るには

あらずやとかつらおとこにはあらずやといふ心也

「五七ウ

「五七オ

「五八オ

雲のうへちかくてはさしもみえさりきなといへ
るその心みえたり

089 (一四九七⑥) 竹河6

左大臣うせ給ひて後右は左にとう大納言は左大
将かけ給へる右大臣になり給ふ

うせ給へる左大臣はたれともみえず右は左

にとは夕きりのおと、左にてんし給也とう

大納言左大将かけ給へる右大臣になり給ふと

はこうはいの巻にいへる大納言の事也

090 (一四九七⑦) 竹河7

このかほる中將は中納言に三位の君はさいしやう

になりよろこひし給へり

三位の君とはいせんにいへりし藏人の少將の

事なりこれらはみなこうはいのまきのしぶんし

みかもとの中ほとにあたるへきか

091 (一四九九⑧) 竹河8

みやす所もかやうにそおはすへかめるうちの姫君の

心とまりておほゆるもかうさまなるけはひのお

かしきそかしとおもひ

みやす所とは玉かつらのむすめれんせいみんの御

子をうみ給へりしよりかくいへりかやうにそおはす

「五九オ

「五八ウ

へかめるといへるはかほるの心なりうちのひめ君
とはあけまきの大君のことなるへし

092 (一五〇〇⑩) 竹河9

左の大殿のさいしやうの中將大きやうの又の日夕
つけてまいり

大きやうは夕きりの左大臣になり給へるとき

のことなりさいしやうの中將ゆふつけてまいり

給とは玉かつらのかたへ也心はみやす所にかへ

そめし心はなれすしてなをしたひよる心也

093 (一五〇一⑥) 竹河10

さいしやうはとかくつきくしく

此まきのはてに何こと、もなくかくかける事

おほきなるふしんなりた、した、いまいへるさ

いしやうの中將玉かつらのみやす所をいかにかな

と我思ひのせつなることをつきくしくいひ

よる心なるへし

はし姫

094 (一五二六⑤) 橋姫1

みかとは御ことつてにてあはれなる御すまゐを

人つてにきく事なときこえ給て

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲を君やへたつる

「六〇オ

「五九ウ

此哥の心はよをのかれ思ひすましたる人は浮世
の人をはいとふならひなれはその心にて君やへた
つるとよみ給へるにややへたつ雲は物をへた
つるものなれはそのえむにて君やへたつる
といはんためにをける詞なるへし

095 (一五二九⑭) 橋姫2

おかしきやうにもまめやかなるさまにも心よせ
つかうまつり給ふ事みとせはかりになりぬ
是はかほる宇治の宮へちかつきまいり給ふ年
比になることをいへりしかれば十九にてさいしやう

「六〇ウ

の中將になり給ふよし匂兵部卿の巻にみゆ
此比は廿二はかりのとしなるへし是につけて
まきのうつりかはるとし花鳥の御せつか、
とみえ侍り

しるかもと

096 (一五七三⑫) 榎本1

すい給へるやうに人はきこえなすへかめれと心のそ
こあやしくふかうおはする宮なりなをさりことなと
の給ふわたりの心かろうてなひきやすなるなとを
めつらしからぬものに思ひおとし給ふにやとなんき

「六一オ

くことも侍り

是はかほるのうちの姫君の中の宮に兵部卿を
あはせ奉らんとし給ふに心うつりやすくあ
た人にておはするよしをあね君のき、をき
給てさらけうけひき給はぬをそれをよく兵部卿
のみやの心のそこあたならぬことを給ひしらす
詞也心かろうてなひきやすなるをめつらしからぬ
ものにおもひおとし給ふとは宮のさやうの物に
こそ御心とまらぬゆへにあたにもみゆれまことにさ

「六一ウ

097 (一五七四①) 榎本2

るへき人にはさやうにあるまじきよしの給へる也
なに事もあるにしたかひて心をたつるかたもな
くをとけたる人こそ世のもてなしにしたかひてと
あるもかゝるもなのめにみなしすこし心にたかふ
ふしあるもいかゝはせんさるへきにそなと思ひな
すへかめれは中く心なきたためしになるやうも有
此心はせしやうの人の心かくるもあるよしをま
へいひ出給ふ也たとへは世によく心をきはめて
物しつかなる人にはあらておとけてもうきした

「六一オ

るものはうちみる所も極心さうにみゆるものなりさやうの人はとあるもかゝるも大かたにみなしたかふふしある時いか、はせんちからなしなと思ひなしてたえぬる人もあるものもそれはよく心をきはめたるにてはなくてた、をとけたるきにてよきにはあらずといふことをの給ひいてたる也

098 (一五七四④) 椎本3

くつれそめてはたつたの川のにこる名をもけかしいふかひなくなこりなきやうなることもうち

ましるめり

是も以前のこと葉のすゑなりをとけたる

ものは極心なるやうにあれとまことに心を

おさめぬゆへに川きしのくつる、やうに思ひ

のほかの心もいてくるといふき也これは兵部卿の宮はうへはあたにみゆれとそこふかくおさめ

たまへる人なれはまことにあた／＼しきことは

あるましきよしをあね君にかほるのかたり給

へることはなり

「六二ウ

あけまき

099 (二六一一⑩) 総角1

秋のけしきもしらすかほにあをきえたのかた

えいとこくもみちたる

おなしえをわきてそめける山姫にいつれかふかき色と、ははや

此哥はかほる姫君のかたへおはしけるをよくのか

れ給てさしかくれ給へるにそれをもしらて中

君にその夜ほのかにあひ給て後かほるより

こうてうの文にはあらてあね君のかたへ此哥

をつかはし給へり此心はしるかもとの巻より

此まきにいたるまであまりにひめ君のわれに

のかれ給へるをかこちて兵部卿の宮に御心もひ

くやのやうにいひなし給ふ事たひ／＼なりそ

の心にて同しえをとほ宮とわれとはかはらぬを

みやに御心そむやといはんとてわきてそめ

ける山ひめとよめりいつれか御心さしふかゝらん

といへる心なり

100 (二六一一③) 総角2

御返し

山ひめのそむる心はしらねともうつるふかたやふかき成らん

「六三オ

「六三ウ

「六四オ

此心はかほるの、給ふかたをは一かうにいはず、
山ひめのそむるこの葉のいろにいひなせりおも
しらくや又あるせつおなしえをわきてそめ
けるとはきやうたいの女宮なからひめ君にかほ
るの心をそめけると也いつれかふかきいろと、
は、やとはとひ給へかしの心なり返しの心は
すてに中君にうつろひ給ひぬれば心さし
のふかきかたなるへしといひのかれ給へる心にや
云

101 (二六二五¹³) 総角3

こはたの山に馬はいか、侍へきいとも、きこえやさ

はり所なるらん

是はこはたの山に馬はあれと、いふ哥にてかけり
心は兵部卿の宮中君のかたへ三日夜におはしま
さんとおほし立けれと人めをは、かりて暮ゆけ
はかほるの思ひわひて車などは所せくにはかには
などおほして馬にてもおはしまさんやの心也

102 (二六六四⁷) 総角4

世の人のすさまじきことにいふなるしはすの月夜
のくもりなくさし出たるをすたれまきあけてみ
給へはむかひの寺のかねのこ糸枕をそはたて、けふも

暮ぬとかすかなるひ、きをき、て

是も遺愛寺のかねはまくらをそはたて、と
いふ詩を吟してけふもくれぬとかすかなるひ、き
をき、てといふ所つ、き夕のやうにきよゆた、
これは月にすたれをまきあけて此詞をきん
し給ふつゝるてに 山鳥のいりあひのかねのこ糸ことに
といふ哥をきんしそへ給さませかほるのひめ君う
せ給ひてのちつれくといみにこもりて月
日ををくり給そのあはれを思ひつ、くる心な

「六五ウ

「六四ウ

るへし遺愛寺鐘欝枕聴といふ詩のこととはと
いりあひのかねのこ糸ことにけふもくれぬといふ
哥とをもつてかけりむかひの寺のかねのこ糸
に月さし出たる時分けふもくれぬとくはんし給ふ
心なるへし宇治のひめきみのうせ給ふて後つ
れくともり給ふそのあはれを思ひつ、け
給ふおりなりまへのことはにひねもすになかめ
くらしとあり

さわらひ

「六六オ

「六五オ

103 (一六八二⑨) 早蕨1

中納言殿より御くるま御せんなど人まはかせな
とたてまつれ給ふ

はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくおりもきにけり

此哥の心は中の君あね宮のふくにてその

衣かへの比いろくのきぬなとをかほるよりま

いらせ給へる時の哥なりじせつのはとなき事

をいへり花のひもとくは大方ちよふくの心なから

都へいて給ふへきいわみの心も侍るへきにや

104 (一六八五⑧) 早蕨2

つれくまのまきはしも世のうきなくさめにも

「六六ウ

心とめてあそひ給ひしものをなと心にあまり

給へは

みる人もあらしにまよふ山里に昔おほゆる花のかそする

此哥のかみの句は中の君のわか身都へ出給ふ

へきの心なりむかしおほゆるとは梅の香によ

そへてあね宮の御心をおもひいて給ふ心成へし

やとり木

105 (一七〇一①) 宿木1

其比藤つほときこゆるは故左大臣殿の女御に

なんおはしけるまたとくうと聞えさせしとき

「六七オ

人よりさきにまいり給ふにしかはむつましくあ

はれなるかたの御思ひはことにもなし給ふめれと

此女御たれともみえずむめかえに左のおと、

の御むすめとてれいけいてんと侍りしそれに

や名はかはることも侍へきにやこ、にまたとく

くうときこえし時人よりさきにまいり給こと

有梅かえに源氏の君いまの中宮のまいり

給へきををさへて左のおと、の御むすめをまいら

せさせ給ひし事人よりさきにといへるにかなへはもつ

ともうたかひなき也

106 (一七〇二③) 宿木2

女御なつの比もの、けにわつらひ給ひていとほか

なくうせ給ひぬ

是はふちつほの女御の御事也

107 (一七〇四④) 宿木3

御碁なとうたせ給くれゆくま、にしくれをか

きほとにて花の色も夕はへしたるを御らんして

是は今上かほる中納言と御碁うたせ給てき

く一枝ゆるすなどの給ひし比なりこれは藤つ

ほの女御なつの比うせ給ふそのとしのこと成へし

「六八オ

あけまきの大君うせ給へるよくねんのことなるへきか

108 (二七〇八②) 宿木4

左大臣殿にはいそきたちて八月はかりにときこえ給ひけり

是は左のおと、の六君を兵部卿の宮にあ

はせてまつり給へきのさためなり此比はう

はそくの宮の第三年にあたるへし

109 (二七一八⑦) 宿木5

この廿日あまりのほとにかのちかき寺のかねのこゑもき、わたさまほしくおほえ侍るを忍び

てわたさせ給ふてんや

是はうはそくの宮の第三年のほうしのつひて

に中君の二条院にてかほるへかくの給やる詞也

110 (二七二六⑨) 宿木6

おもふやうなる世もあらは人にまさりける心さしのほとしらせたてまつるへき一ふしなんあるたはやすくはこといつへきことにもあらねは命のみこそなどの給ふ程に

是は二条院にて中君に兵部卿の宮の、

たまへることなり此一ふしといへる事あらはに

「六九オ

そのことはりみえず此心は春宮御くらゐにつき給は、兵部卿宮を春宮にたて奉らせ

らるへき御心うへのおほしけることを心にもち

てしからはわか身位にもつき給は、きさきにも

も此君をとおほす宮の御心なり

111 (二七七八⑫) 宿木7

あせちの大納言は我こそかゝるめもみんと思ひし

かねたのわさやと思ひゐたまへり此宮のは、

女御をそむかし心かけきこえ給ひけるをまいり

給ひて後もなを思ひはなれぬさまにきこえか

「六八ウ

よひ給ひてはては宮をえたてまつらんの心つきたりければ御うしろみのそむけしきもらし申けれと

是はかほる大納言の女宮ふちのえむの時天

盃たまはり給ふをみて此大納言の我こそと

はおもふ心也此大納言誰ともみえず尋ぬへし

あつまや

112 (二八二五⑥) 東屋1

うこんとてたゆふかむすめのさふらふきてかうしおろしてこゝによりてなりあなくらやまたおほとのおふらもまいらさりけり

「七〇オ

是は兵部卿の宮のうきふねの君をはしめて
二条院にてみそめ給ひし時の事也うきふね
の巻にてうこんといひし人もこゝにありと
兵部卿の御らんしておほしたりし此人にや
さりながらそれにはあらざるへきかふしんある
によりかきいて侍る也

113 (一八三九^⑬) 東屋2

は、君たつやといとあはれなる文をかきておこ
せたまふ

是はひたちの守の北のかたのうき舟のきみを

「七〇ウ

ひそかなる所にすへて心ほそきすまぬをおも
ひやりて文たてまつりし時のことをいへり此ひめ
君は我むすめなれと八宮の御子なればわか
子の様には思ふましけれとあはれなるやとり
のさまをとひたてまつる時大かたの人のほゝ
などの様に文まいらする心かける也たつとは
やうにといふ心なりは、君などのやうにとかけ
るはうやまふへき人の心此こととはにてみえ侍る
にやは、君たつやと、他本にあり如何おなしこと

「七一オ

はりにや

うき船

114 (二八六四^④) 浮舟1

うつちおかしうつれくなりける人のしわざとみ
えたり山たちはなつくりてつらぬきそへたる枝に
是はかほる手ならひの君をうちにをき給へるか
たより中の君の御はらのわか君のかたへまいら
せらるゝうつちのさまなり哥の心はまたふ
りぬものにはあれと、はまたふりをたちい
れてよめり心はわか身にまたふりぬ心也し

「七一ウ

ならばぬことなれと君かためにといふ心なりま
つとしらなんとはゆくすゑのさかへをまつとしれと
いふ心也もし松のえたなにてまたふりを
おかくしてうつちにそふるものにやたつぬへし
なをふれぬことをふりぬといふへき儀おほつ
かなけれとも古今の哥に
たのめこしことのは今は返してんわか身ふるれはをき所なし
といふ哥はおとこの文をかへすとてよめる哥也
わか身ふるれとはふるされぬれはといへる心

「七二オ

によめれはまたふりぬといへるもまたふれぬ
といふ心になふへきにや

115 (二八六九⑪) 浮舟2

うちつけめかとなをうたかはしきにうこんとなの
りしわか人もあり

是は兵部卿の官うき船の君のかたへはしめて
おはしてももの、ひまよりみ給へる時のことなり
うこんとなのりし人とは二条院にてたいふかむ
すめのうこんか事なるへししかれとも此うこん
はたゆふかにはあらざるむすめのよしかけろふに

みゆいか、

116 (二八八七⑪) 浮舟3

山のかたはかすみへたて、さむきすさきにたてるか
さ、きのすかたも所からはいとおかしうみゆるに
かささきとはからすのこと也いまこ、にかけろは
つねのさきの事なりとみゆかきたかふる事に
やまたさきといふへけれと何となくかさ、きと
いへはこと葉のおもしろくきこゆれはなすらへて
物かたりのさくしやかきけるにやとみゆいかん
かけろふ

「七二ウ

「七三オ

117 (二九四六⑩) 蜻蛉1

なかこもりし給はんもいとひんなしいきといきて立
かへらんも心くるしなとおほしわつらふ月たちて
けふそわたらましとおほしいて給ふ

此月立てとはさ月なるへしつきの詞におま

へちかきたちはなの香のなつかしきに時鳥の一
こゑはかりなきてわたるやとにかよは、とひとり
こち給ふもあかねはなと侍れはうたかひなき五
月もある人ふしんにいへること侍れはかくしるし
つけ侍るなり

118 (二九七七⑭) 蜻蛉2

女たにかく心やすくはあらしかしさすかにさるへからん
事をしへきこえぬへくありやうくみしり給へ
かめれはうれしきとの給へは

是はかほる中納言后宮の女はうともの侍る所
におはしてわか心のあたになきさまをのたまへる
こと葉也

119 (二九七八⑯) 蜻蛉3

いといらへにく、のみ思ふなかに弁のおもと、てなれ
たるおとなそもむつましく思ひきこゆへきゆへ
なき人のはちきこえ侍らぬやは

「七三ウ

「七四オ

是はわかきとちはかほるの返事をきこえにく
く思ふほどに弁のおもと、いふかはちきこえ
ぬやは侍るへきといふこと也

120 (一九七八③) 蜻蛉 4

物はさこそは中く侍るめれかならずそのゆへたつ
ねてうちとけ御らんせらるゝにしも侍らねと
かはかりおもなくつくりそめてける身におはさらん
もかたはらいたくてなんとときこゆれば

物はさこそは中く侍るめれとは世にかゝることの
侍る也とまついへる心はみなわかき人のほちて

「七四ウ

返事せぬを弁はすこしおとなしき人なればそは
にて此かへり事をいはんは身にあらねとこ
の御返を申さてはの心也それをいはんとてか
くおもなくつくりそめてける身におはさらん
かたはらいたくてとはいへり是をはちなくわか
申事を思ひていふ詞也なを物はさこそとは人の
いふへきことをそはにていふことしせんまた世に
有事なるをかくいへり

121 (一九七八⑥) 蜻蛉 5

はつへきゆへあらしと思ひさため給てけるこそく

「七五オ

ちおしけれなどの給て

是は弁の君はわかきたくひのやうにはちき
こえかたくてといへるをかほるの我にははつへきゆ
へあらしとの給ふこそ口おしけれとの給へる也

122 (一九八一④) 蜻蛉 6

さうのこといとなつかしうひきすさふつまをと
のおかしうきこゆ思ひかけぬによりおはしてなとかく
ねたましかほにかきならし給との給ふにみなお
とろかるへかめれとすこしあけたるすたれうちおろ
しなともせずおきあかりてにるへきこのかみや

「七五ウ

侍るへきといらふるこゑ中將のおもと、かいひつる
なりけりまるこそ御は、かたのおちなれとはか
なきことをの給ひて

是は女一宮の女はうの琴ひく所へかほるおは
していへる詞也ねたましかほとは遊仙窟に女
の琴ひくをきゝていへることありけるをいま
かほるのよそへていへるなりにるへきこのかみや侍
るへきといらふるこゑとはおなしくゆうせんくつに

容貌 ようはうのかほはせは 似舅 ばんあんじん 播安仁之外姪 かは、かたのおいなれは也 氣調 きてうのいきぎしは 如兄 このかみのこし 崔季 さいき

「七六オ

娃けが之が少せう妹まい 此こことはのうちにこのかみのことしと

いふことをとりて中將のおもとにへきこのか
みや侍るへきといへり心はかほるの北のかたは女
一宮のいもうとにてましませはその心にていへる
也またかほるまろこそ御母かたのおちなれとの給
へるはかほはせおちにたりといふ詞あれはま
ろこそ御母かたのおちなれといへり是は女一宮を
かほるのあはれとおほす心を此女はうともそ
の心をしりていへる時のことなりかほるもまた

「七六ウ

其心あるによりまろこそなとの給へる也時
のされこと、もなるへし

手ならひ

123 (二〇三⑬) 手習1

こよひこの人々にやくはれんなどをしからぬ身
なれとれいの心よはきはひつとつ一はしあやうかりてかへり
きたりけんもの、やうにわひしくおほゆ
是は手ならひの君小野にて大あまのふしたる
所にね給へる時としよりのをそろしけなるか
あまたるて此君をみやりたるなどをおそろし

「七七オ

くおほす時このことを思ひ出給へり一橋はしあやう
かりて帰るとはむかし身をなけんとするもの
川をわたるにひとつはしのありけるをわたる
かあやうければ立かへりしことありとなりそれ
を我身によそへおほす心なり此ふることしる
せる物などはみえず此物語に侍るうへはうたかひ
なき事にこそ此手ならひの君はうち川に身
をなけし人のおほえすなからへておほする人也
一たひ身をなけし人のいま此ものにやくはれ

「七七ウ

むとおそろしくおほす時一はしの事おほし
いてたる也

夢のうきはし

124 (二〇五七②) 夢浮橋1

此人もなくなり給へるさまなからさすかにいきは
かよひておはしければむかし物語に玉どののを
きたりけん人のたとひを思ひいて、さやうなること
にやとめつらしかりて
是はかほる大將よ川にのほり給ひし時僧都の
手ならひの君のうちにて物にとられしを此僧

「七八オ

都みつけ給ひしことを語る詞也玉殿の事河
海花鳥にも此ちうなしこんあん仁徳天わう
なにはにて春宮をたかひにゆつり給ひし時
宇治の宮我あれはこそとてうせ給ひけるに
おほさゞきのみことをとろきおほして宇治
におはしまし御らむせしに宇治の宮棺くはんに
ありなからおき給てわれは天めいなりなどの
給ひてまたうせ給ひけることをかけるにや

「七八ウ

此この一冊いっさつ宗祇そうぎ法師ほうし抄出せうしゅつ之所の也なり命めい下じ可か二
一覽らん一由よし上を其その後ちげ下かう向しゅく関東くわんとう一於おいて相模国さがみのくに一卒しゅつ
去きよ尤よし可かレ歎なげく而のみ已のみ

かたみともその世にいはぬ心にて
ふかくかなしき筆のあとかな

富小路とみのかみち
俊通としみち 在判

「七九オ

